

メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第一3:6～10 「私たちの生きがい」

[6]「ところが、今テモテがあなたがたのところから、私たちのもとに帰って来て、あなたがたの信仰と愛について良い知らせをもたらしてくれました。また、あなたがたが、いつも私たちのことを親切に考えていて、私たちがあなたがたに会いたいと思うように、あなたがたも、しきりに私たちに会いたがっていることを、知らせてくれました」

パウロはサタンの妨げによってテサロニケへ行くことができないので、代わりに同労者テモテを派遣した。それは彼らの信仰について彼らを強め励まし(3:2)、また彼らの信仰を知るためであった(3:5)。そして今、テモテが帰って来て報告してくれたことは良い知らせであった。それは彼らの「信仰と愛」についてであった。この「信仰」とは神の真実を信頼する正しい信仰の態度。「愛」とは兄弟相互の交わりにおいて息づく愛のこと。これこそパウロたちが彼らに望んでいたものであった。しかも、テサロニケのクリスチャンたちはパウロたちが彼らに会いたいと切に願っているのと同様に彼らもしきりに会いたがっているという。これらのことからパウロたちとテサロニケ教会との交わりが、一方通行ではなく同じ思いに引き寄せられるうわしい相互関係にあるということがわかる。

[7]「このようなわけで、兄弟たち。私たちはあらゆる苦しみと患難のうちにも、あなたがたのことでは、その信仰によって、慰めを受けました」

パウロたちは現在、サタンの妨げに会いながら非常な困難と苦しみの中で福音を宣べ伝え続けている。その現実が厳しいものであればあるほど、テモテによって伝えられたテサロニケ人たちの信仰と愛についての良い知らせは大きな慰めを彼らにもたらした。

[8]「あなたがたが主にあって堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります」

福音を宣べ伝えられたテサロニケ人たちが主にあって信仰に堅く立っていてくれる。これこそ福音を宣べ伝えたパウロたちにとっての生きがいであった。

2:20節でパウロが語った「あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです」のことばはこのように現実のものとなった。福音を宣べ伝えられた者が主にあって堅く信仰に立っている。このような様子を見聞きすることは、福音を伝える者たちにとってすばらしい生きがいとなるのである。

[9]「私たちの神の御前であって、あなたがたのことで喜んでいる私たちのこのすべての喜びのために、神にどんな感謝をささげたらよいでしょう」

喜びのうちにあるパウロたちは、ここで神に深い感謝をささげようとしている。テサロニケの人々が主にあって堅く立っているという現実、決してパウロたち自身の知恵や力によるものではなく、信じる者に働かれる神の恵み、神の力によるものである。それゆえパウロたちはテサロニケ人たちのことで誇るのではなく、ただ

喜びに満たされて感謝をささげ、神に栄光を帰するのである。

[10]「私たちは、あなたがたの顔を見たい、信仰の不足を補いたいと、昼も夜も熱心に祈っています」

神への感謝に続いて、彼らの祈りについても知らされる。彼らは昼も夜も熱心に祈っていると言う。これは「昼も夜も」とあるように非常に熱心な祈りである。その目的はテサロニケ教会の人々に会いたい、その信仰の不足を補いたいという現実的なものであった。ここにパウロたちの牧会者としての姿勢を見る。彼らはテサロニケ教会の置かれている立場が非常に困難であることを知っており、それゆえ何とかしてその信仰の欠けを補ってやりたいと熱心に願い、祈っているのである。

パウロたちがテサロニケ教会のことを思い、熱心に祈っているように、私たちのことも誰かがどこかで熱心に祈りに覚え、支えていてくれるのかもしれない。私たちもお互いに助け合い、補い合い、信仰の友のために熱心に祈りに励む者となりたい。